

2019年8月24日

私立大学図書館協会
国際図書館協力委員会
委員長 御園 和之 様

実践女子大学・短期大学部図書館
伊藤 民雄

2019年度海外認定研修 報告書

2019年6月22日（土）から6月27日（木）まで、米国ワシントンDCでの研修に参加させて頂きましたので、以下の通り報告いたします。

I 研修の目的

図書館先進国と言われるアメリカ合衆国の大学図書館、およびアメリカの図書館員が多数集結する米国図書館協会年次総会、において、現地の図書館員、企業関係者との意見交換を通じて、以下の4つの項目の確認を行う。

- (1) アメリカにおけるラーニングコモンズの総合評価（北米研究図書館協会）
- (2) 文献提供方法の先進的取り組み（ジョージタウン大学、メリーランド大学）
- (3) オープンサイエンスの新しい知見（年次総会の各種セッション）
- (4) 現地法人を通じた図書館向け電子書籍配信サービスの情報取得（年次総会の展示会）

II 研修スケジュール

6月10日（月）事前質問締め切り

6月22日（土）ワシントンD.C.公共図書館（West End分館）＊本報告では省略

6月23日（日）ALA年次総会

6月24日（月）北米研究図書館協会(ARL)

ジョージタウン大学

メリーランド大学

6月25日（火）米国議会図書館

＊6月26日～27日は時差の関係で移動日である

III 報告

- (1) 北米研究図書館協会（Association of Research Libraries）

【組織概要】 1932年に設立された、米加の大学図書館・研究図書館による非営利団体で、会員数は124機関である。コレクション、保存、著作権、オープンアクセス、多様性、グローバルアウトリーチ、統計、評価、リーダーシップ等多様なテーマの取り組みを行っている。

【説明概要】 カナダとアメリカの研究図書館のトレンドという演題で説明が行われた。Association of Research Libraries (ARL=北米研究図書館協会)は北米主要124図書館の会員組織である。会員館では1万3千人の専門職が従事している。全会員館の資料費は10億4千万円以上にのぼる。ARLの使命は、研究、学習、学術コミュニケーションを推進するために、①アイデアや専門知識のオープンな交換の促進、②平等と多様性の促進、③アドボカシーや公共政策の推進パートナーシップの構築、④集団的努力の促進、以上4点である。2019～2021年の協会のアクションプランは、協会の中核をなす研究者と奨学金によって、研究図書館とその親組織、研究と教育のコミュニティ、公共政策立案者の3つの領域が交差する場所(図1)で、公平で永続的な研究情報環境を前進させることに最大の価値を創造することにある。各々の領域の研究内容(キーワード)は図2の通りである。



図1 3つの焦点



図2 今日の研究内容

3領域の焦点における、プログラムの優先度は、①公共政策の提唱者、②情報の永続化・バリアフリー化に向けた全社的な取り組みを推進、③多様で、公平で、包括的で、アクセス可能なサービス、コレクション、および作業環境を作成する、④研究図書館の実践、有効性、影響に関するデータと分析を提供する、としている。

学術雑誌の購読費用、図書館スタッフ数の減少等、常に「データ分析」が必要である。2年毎に図書館評価が行われ解決策が模索される(図3)。図書館の動向は、蔵書コレクションのための空間を学習空間に変化させつつある。

ARLの会員館のスタッフが、利用者の現在および将来のニーズを満たすことができるようにARL Academyを設置し、リーダーシップ・フェロー制度、図書館管理能力、デジタル奨学金講習会、指導・指導、の機能を提供している。

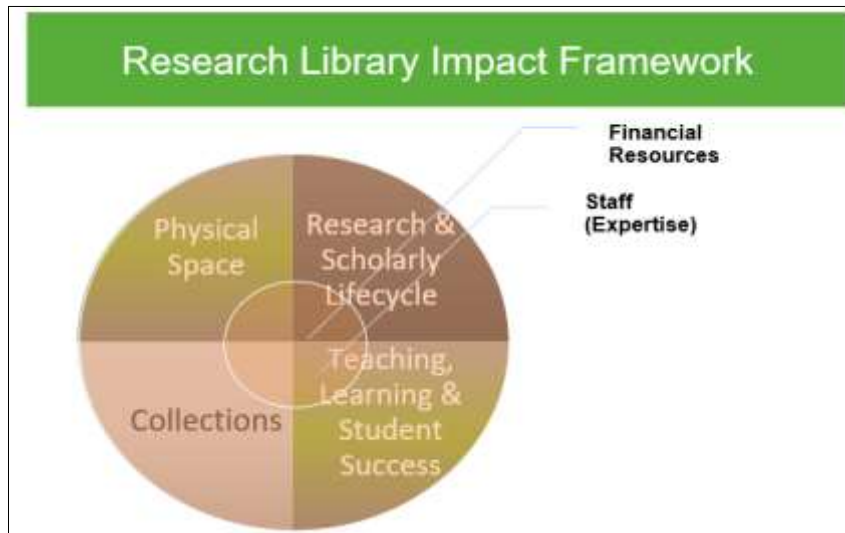


図3 研究図書館の効果測定

【質問事項に対する回答】事前質問で、「ラーニングコモンズの総合評価」をリクエストしたが、参加者からの事前質問多数のため、残念ながら省略されてしまった。そのため、帰国後、6月28日に、事務局長の Mary Lee Kennedy 氏に電子メールにて質問を行ったところ、副専務理事の Sue Baughman 氏から回答が寄せられた。

【電子メールによる回答】

2014年9月にまとめた報告書「SPEC KIT 342 : Next-Gen Learning Spaces」が、ラーニングコモンズに関して公表した最新の情報です。その後には追加調査は行っておりません。関連情報として、2018年12月に Learning Spaces Collaborative (LSC) と Networked for Networked Information (CNI) が後援した円卓会議の報告書である「Libraries as Spaces for 21st Century Learners & Learning」があります、とのことだった。

全文が提供されたのでまとめると、前者は、図書館の学習空間の構成と利用、過去10年間に起こった発展と変容について、また学習空間のための将来計画を、連続する第一世代のインフォメーションコモンズと次世代スペースの間のどこに位置するかを決定することについて検討するとともに、事例集にもなっており、現在どのような学習空間が存在しているか、それらの空間が創設以来どのように変化してきたか、そしてこれらの空間が他の図書館の運営にどのような影響を与えてきたか、を考察している。一方で後者は、円卓会議の報告で、4人の建築家による話し合いと、選択されたタイプのスペースに関する少人数のグループディスカッションをまとめたものである。図書館における学習のための空間の開発の動向と、それらの空間がプロジェクトのニーズを満たしているかどうかを判断するために、どのようにそれらの空間を「インタビュー」するかに焦点を当てている。

(2) ジョージタウン大学 (Georgetown University)

【図書館概要】 1789年創設。米国内カトリック及びイエズス会の大学としては最古の大学である。2017年度の入学者は、学部1,600人、大学院2千人、その他1,700人である。図書館は9館あり、見学したのは1970年に建設された中央図書館のMark Lauinger Library、および神学図書館のWoodstock Theological Center Libraryである。同館の戦略的イニシアティブ 2015-2020では、①教育、学習、および研究のための触媒としての学術プロセスへの参加、②ユーザー中心のイノベーションとコラボレーションによる知識創造の促進、③図書館のスペースを学識、研究、熟考、そして協力のための憩いの場 (haven) に変える、④公益を推進するためのキャンパスとコミュニティの出会いの拡充、⑤卓越した図書館サービス、コレクション、スペースを提供する、多様で有能なスタッフの採用、育成、維持、を掲げている。2001年に1階を改築し、Gelardin New Media Centerをオープン、さらに2016年秋に、ものづくり工房的なMaker Hubが設置された。また、貴重書コレクションには同大学から名誉博士号を授与された遠藤周作の手書き原稿が含まれている。

【説明概要】 図書館組織は120名で、うち55名が図書館員で、ほぼ専任職員である。残りは学生スタッフである。紙資料から電子資料への移行期であるとし、電子書籍提供の課題として、複数のプラットフォームが混在するため、ユーザーに対して適切な統一サービスができていないことを挙げた。研究領域の多様化のため、複数の主題図書館員が連携して、それに対処している。また、学際的な研究に対しては学外の図書館とも連携している。利用者からの支持が高いサービスは1対1の研究支援で、昨年度の統計は750件である。支援後のアンケート結果は9割以上の満足度を得た、とのことである。17大学から成るワシントン大学図書館コンソーシアム (Consortium of Universities of the Washington Metropolitan Area) に参加し、特にGeorge Mason Universityとの強い協力関係があると説明された。

【ラーニングコモンズ】 今回は閲覧室全体が見学から外れた。ALA・米国図書館研修 2016の見学場所であったGelardin New Media Centerは入口から見るに留まった。同センターはDiscover (発見)、Design (デザイン)、Share (共有)、Inspire (鼓舞) の四語が標語となっている。帰国後、ARLの報告書「SPEC KIT 342: Next-Gen Learning Spaces」のラーニングコモンズの事例として採り上げられている、ことが分かった。



ラーニングコモンズ前で

Maker Hub の様子

【文献提供方法について】同館は蔵書検索システムとして ExLibris の Primo を採用している。Primo による電子書籍提供が何故うまくいかないのかと尋ねたところ、2018 年に Washington Research Library Consortium 全体で Primo を導入した。電子資料には、自館導入とコンソーシアム導入の資料があり、コンソーシアム導入の電子資料が Primo に表示されるのは構わないが、自館導入の電子資料が他館で表示されると、コンソーシアム全体の利用者を混乱させることを懸念しているとのことであった。論文提供については、基本的に ILL を優先しており、文献単位で購入する電子的ドキュメント・デリバリーや論文レンタルの利用は二の次である。そのため、高額な市場レポート類の取寄せは断ることがある、とのことであった（同館サイトには、入手できるのはハードコピーオンリーとある）。

【所感】伝統的なサービスを重視して行っているとの印象を持った。閲覧室とラーニングコモンズでの利用者の様子が全く見られず残念だった。

(3) メリーランド大学 (Maryland University)

【図書館概要】メリーランド州の総合大学である。学生数は4万1千人を数える。1856年に州政府より農業大学として設置認可を受け、創立され、充実した設備を擁し、質の高い教育内容を提供する総合大学に発展した。図書館は7館ある。標語として、「昔ながらの情報を保存する図書館の使命を促進し、それを広くアクセスせしめる。大学とコミュニティのデータ、情報、そして知の資産 (assets) を管理する」を掲げている。見学したのは2館で、一つが中央図書館に相当する McKeldin Library で、GIS 空間データセンター、多数の3Dプリンタを置く Maker Space を併設している。もう一つが Hornbake Library の北館で、日本占領期研究資料を所蔵するプランゲ文庫を有しており、日本人スタッフが在籍している。



ラーニングコモンズの様子



プランゲ文庫所蔵資料（手前は手塚治作品）

【説明概要】研究図書館として全国42位に位置する。海外留学生のための修士課程もある。図書館スタッフは260名、うち専任は143名、残りはサポート、時間制の学生のスタッフである。図書館の誇りとして、スタッフを訓練し、新しいアイデアを出し合える環境を整

備していることである。図書館の戦略として、コレクションからサービス重視へ、書架からラーニングコモンズへの転換を行っている。その象徴がラーニングコモンズということになる。他館との連携には、14 大学から成るメリーランド・コンソーシアム (University System of Maryland & Affiliated Institutions (USMAI) Library Consortium) に参加している。また、北米 10 大学の Big Ten Academic Alliance の会員大学である (現在、14 機関)。

【ラーニングコモンズ】2012 年に、中央館の 2 階の書架を撤去し、Terrapin Learning Commons (TLC) と呼ばれるラーニングコモンズをオープンした。中央館以外に STEM 図書館にも 3 年前にリサーチコモンズを設置している。TLC 自体でミーティングを行ったため、肝心の、利用者がどのように利用しているかが見られなかったのは残念であった。

【文献提供方法について】同館は蔵書検索システムとして WorldCat Discovery を利用しており、未所蔵資料については OCLC の ILL システムで充足しているのが推測される。また、Big Ten Academic Alliance 加盟の 14 大学・研究図書館センターからの貸借サービスもあり、文献提供方法では困ることはなさそうである。そのためジョージタウン大学で表面化していた問題、複数図書館による共同構築している蔵書検索システム WorldCat Discovery による電子資料の提供について質問したが、特に問題はないとのことで、Discovery チームを作って電子資料の維持管理を行っているとのことだった。また紙書籍より電子書籍の購入の方が多いとのことである。

帰国後、同図書館サイトで、バージニア州南東部周辺図書館同盟の CIRLA (The Chesapeake Information and Research Library Alliance) にも加盟している (これには議会図書館、ジョージタウン大学も加盟) ことが分かり、電子メールで同館担当者にどのような協力体制なのかと聞いたところ、他の図書館との ILL 同様に、普通に貸借しあっているとのことだった。また、同館で充足できない資料の電子的補完については、ReprintsDesk 社の Article Galaxy と CCC 社の GetItNow を利用していることが分かった。

【所感】図書館内の雰囲気が、日本の地方の国立大学図書館と非常に似ていた。ラーニングコモンズが作られたのが 2010 年代に入ってからということからも分かるように、最先端を走るのではなく、伝統的なサービスを重視した図書館運営である、と感じた。

(4) 議会図書館 (Library of Congress)

【図書館概要】 1800 年にアメリカ合衆国議会の図書室として発足した。1814 年に米英戦争中に焼失したため、第 3 代アメリカ合衆国大統領トーマス・ジェファースンの個人蔵書を買上げ、それを基礎として、今日では蔵書数、予算額、職員数すべての点において世界最大規模を誇る国立図書館に発展した。目標として、すべてのアメリカ人は議会図書館につながっている、のもと、「つながりは図書館にとって多くの形態を持つ」を標語にしている。スタッフ一同の統一された役割として、memory (記憶)、knowledge (知識)、imagination (想像力) を提供し、支援する、としている。

【説明概要】アジア部局にて議会図書館の説明を受けた。議会図書館には、日本人スタッフが3名在籍している。議会図書館は、2019年から23年までの戦略計画として、議会と国民に対して、関与し、刺激し、情報提供することをミッションとし、4つの目標としてアクセス拡大、サービス向上、資源最適化、インパクト測定、を掲げた。

【質疑応答】地理・地図部局の目録担当者の方がいたので、目録作成のタイムラグを尋ねたところ、アトラスと一枚物の地図があり、アトラスは受入後即目録作成を行う。参照するものがない1点物については時間がかかることもある。目録は基本的に、収集した各言語の出張所で作成する、とのことだった。

(5-1) ALA 年次総会参加セッション1

【演題】 Spotlight on Serials: Open Access: Current and future trends in OA in Latin America

Sunday, June 23 1:00 PM - 2:00 PM Location: Washington Convention Center, 154A-B

【概要】講師は、Ivonne Lujano、Solange Santos の2人である。Lujano氏は、ラテンアメリカにおける Directory of Open Access Journals (DOAJ)の代表者である。ラテンアメリカにおけるオープンアクセスの歴史、ベストプラクティスの出版と標準、そしてDOAJが学術研究ジャーナルを世界的に改善するためにどのように役立つかについての説明を行った。ラテンアメリカにおけるOAイニシアティブを支える基盤には4つのプラットフォームがある。①1995年に成立した学術雑誌ダイレクトリ Latindex (2万7千誌、150万論文)、②1998年に公開されたブラジル発祥のOA電子ジャーナルプラットフォーム SciELO (14ヶ国、1,280誌、74万論文、1千7百万引用)、③メキシコ自治州立大学が2003年に公開した RedALyC (1,257誌、58万論文)、④OA化を推進するラテンアメリカの国際組織 LA Referencia (9ヶ国ノード、143万文書)、以上である。1985年から現在までを3段階に分け、現在目指しているのは「国際化」である。具体的には、国際データベースの Scopus と Web of Science の索引にOA誌が収録されることである。課題として、科学コミュニケーションにおける新自由主義として、予算修正、プログラムの終了、インパクト・ファクタ・ベースのポリシー、不安定な労働条件、を挙げている。

一方、Santos氏は、ラテンアメリカやカリブ諸国、南アなどの電子ジャーナルを収録する“Scientific Electronic Library Online” (SciELO)の編集担当者である。SciELOが、これらの地域の科学成果の認知度を高めるための戦略として、なぜラテンアメリカがオープンアクセス出版モデルの使用を進めているのかを説明した。SciELOがいかに各国の状況と優先事項に焦点を当てて、オープンアクセスジャーナルの16の全国コレクションのネットワークを推進し、発展させたのか、また、グローバルで包括的な学術コミュニケーションに対するSciELOの主張を説明した。

【所感】セッション参加者は100人以上入る部屋に30人程度であった。両者の発表は、ラ

テンアメリカの OA 事情を 30 分で図表を使いながらコンパクトに説明されたので、内容的に理解できた。日本にも OA を支える複数のプラットフォーム（ERDB と学協会著作権ポリシーデータベース、J-STAGE、学術機関リポジトリと IRDB）はあるが、対応不十分と思われる学協会の OA 事情を把握し、推進する仕組みが必要だと感じた。

(5-2) 参加セッション 2

【演題】 Getting On Board with Open Educational Resources: A Conversation About Collaborative Implementation of OERs / Collection Management and Electronic Resources Interest Group (ALCTS CMS)

Sunday, June 23 2:30 PM - 3:30 PM Location: Marriott Marquis, Archives

【概要】 ALA の蔵書構成・電子情報資源分科会によるセッションで、講師は、Anne Osterman と Jenise Overmier の 2 人である（演台には 4 人）。Osterman 氏は、George Mason 大学図書館の Virtual Library of Virginia (VIVA: バージニア仮想図書館) コンソーシアムのディレクター、一方 Overmier 氏はメリーマウント大学図書館の Research and Instruction 図書館員で、行動科学のリエゾン図書館員である。また、Open Educational Resources (オープン教育リソース) イニシアティブも主導している。OER は、誰もが自由に無償で教育に活用することができるデジタル素材のことである（例：教材、ツール、ソフト等）。高等教育のコストが上昇し続ける中で、オープン教育リソース(OER)は、コスト上昇に対する効果的なソリューションとして進化している。OER を利用して学生の直接コストを削減することの有効性は明らかであるが、その実施には教員や図書館員に相当な仕事が必要である。VIVA コンソーシアムは、自らのコースに OER を導入することに関心のあるバージニア州の公立大学および大学教員向けに、すべてのコンソーシアムの図書館にコース開発助成金を提供している。そのコース開発助成金は、実施への障害を取り除き、教員が OER を採用・創出するインセンティブを提供する。

【セッション内容】

バージニア州の学術図書館コンソーシアムである VIVA には、オープンで手頃な価格のコース内容プログラムがあるが、他のコンソーシアムとも協力して、オープンな宿題プラットフォームなど、より大きなプロジェクトを計画したいと考えている。OER を 5 つの R (Retain, Reuse, Revise, Remix, Redistribute) で定義しているが、オープンで手頃なコース内容の方がはるかに広い。VIVA の一般的なスタンスは、すべてのものに対してオープンなリソースがあるわけではないため、利用可能なものはすべて使用しなければならず、図書館の資料も含めて、学生にとってはコストがかからないか非常に低いものでなければならない。

VIVA は、数人の図書館員による SCHEV 図書館諮問委員会へのプレゼンテーションから始まった。同団体はオープンコンテンツをサポートするためのさまざまな方法を提供し、LAC は Open Textbook Network System Membership を決定した。図書館員が教員にオープンな教科書のワークショップを行う方法を訓練する、トレーナー的なアプローチである。

Open Textbook Library(200 ドルの謝礼金を支払った)の教員による本の評価は、このプログラムの重要な構成要素である。この OTN パイロットの後、VIVA は GALILEO、LOUIS、Open Oregon などのグループと話し合い、独自のプログラムを開発した。60 万ドルのプログラムを四つのパートからなるバージニア州議会に提出し、2018 年 7 月 1 日に始まった新たな完全な資金調達に成功した。VIVA コースの再設計助成金の成功例として、バージニア・コミュニティ・カレッジの学生だけで 70 万ドル以上も節約できたと推定される入門用数学教科書がある。

後進の方への助言として、インフラストラクチャにリソースを投資すると、思っている以上にシステムとサービスを確立するのに時間がかかるため、プログラムと教員が何を必要とするかをよく考えることが必要であるとともに、スタッフも絶対に必要である、と結んでいる。

【所感】 演題は興味を引くが、全米では非営利組織や個人がさまざまな教材を無料公開する OER 自体が珍しいものでなくなったためか、セッション参加者は 100 人以上入る部屋に 20 人程度であった。また、司会者の質問（画面にテキスト表示あり）に対し、Osterman 氏と Overmier 氏が口頭で回答する方式が採用されたため、自分の英語の聴取能力では議論の中身さえ理解するのがなかなか難しいセッションであったので、後日、Anne Osterman 氏に回答内容の概要をいただいた。また、もう一人の講演者の Jenise Overmier 氏からも音声記録からテキストを起こすのでしばらくお待ちいただきたい、との連絡があった（8 月 20 日時点では提供されていない）。

(5-3) 参加セッション 3

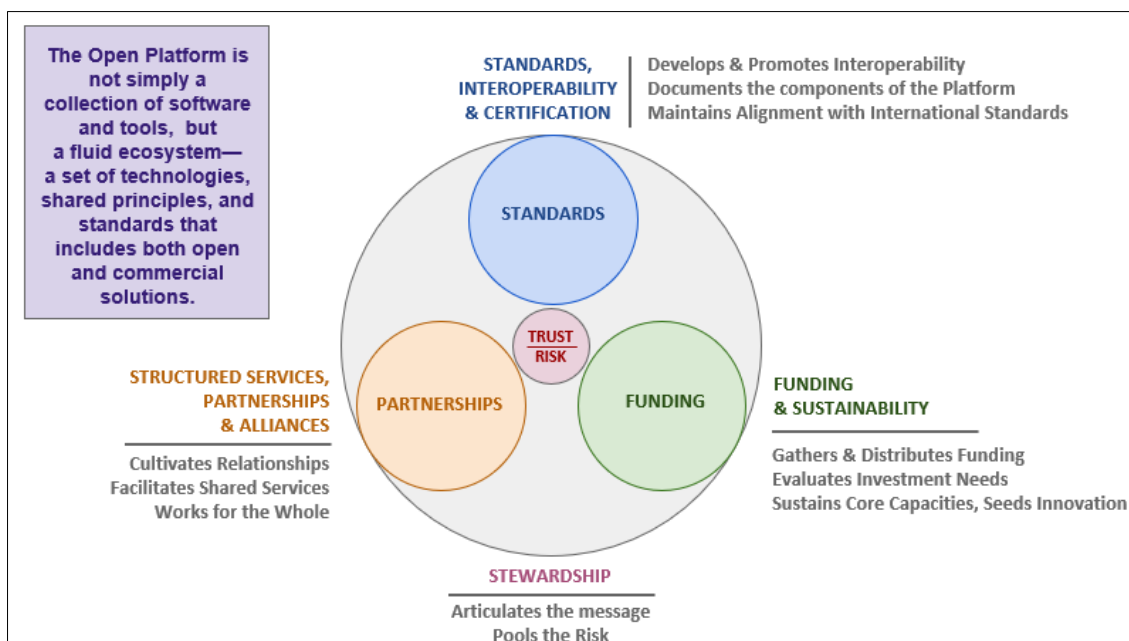
【演題】 Open Infrastructure: A proposal for coherence and interdependence in Community-owned Infrastructure / by Dr. Evviva Weinraub (Associate University Librarian for Collection Services and Technologies Northwestern University)

Sunday, June 23 16:00 PM - 18:00 PM Location: Room 102A, Convention Center

【概要】 図書館情報学でいう「オープン制(openness)」とは何か。オープン制とはイデオロギーではなく、機会にある。それは、学生、研究者、起業家、創造者、そして発明者が、確立したゲートキーパーからの許可を得ることなく、新しいアイデアや新しいモデルを探求し、試し、テストする機会にある。オープン性とは、あるグループの社会的・政治的価値を他のグループよりも高めることではない。無秩序ではなく自由である。「オープン」が社会的・経済的成長とエンパワーメントの環境を可能にするのは、その支持者が容赦なく「オープンであることは良いことです」を主張するからではなく、開放性がなければ得ることが困難あるいは不可能であったであろう目に見える著しい利益を与えるからである。

現在、アメリカにはコミュニティベースの図書館関連組織が複数存在する。Digital Preservation Network や Digital Public Library of America などデジタルデータの保存や利活用を促進する組織、あるいは IIF に代表される標準化の動きや

RightsStatements.Org などの権利関係を明確化する仕組みを推進する組織など、こうした組織は一般的なベンダーでは提供しない、できないサービスを提供している。一方、これらの組織の多くが独立機関であり、政府の恒常的な資金援助を受けているわけではなく、その運営資金は会費や一部の人たちの助成金によって賄われている。2017年にEMCがDPNへの投資を含めて合計300万ドル以上が投資されているとは言え、長期的な運営を維持するための恒常的な資金源を確保することは極めて困難である。こうした課題を乗り越えるための取り組みに焦点をあて、いかに持続可能でオープンな情報プラットフォームを構築しようとしているかについてのイメージが図示された(下図)。



【所感】事務局がコーディネートした特別セッションである。オープンプラットフォームのイメージは、日本のクラウドファンディングによる資金調達や支援に酷似しており、行われることは同じだと感じた。プレゼンテーションは、同時通訳があるとは言え、テキスト画面+口頭説明なので、ある程度の知識がないと、理解することが非常に難しい話であった。

(5-4) セッション全体の所感

「オープン」をキーワードとしたセッションを3つ聴講した。前二者のセッションは、聴講者を20~30名程度しか集められなかったことから、ALA年次総会の参加者にとっては、「オープン」は、時代遅れとは言えないまでも、既に別の機会に聴く機会があり、いまさらながら、関心を引く内容ではない、ということなのであろう。

(6) 展示会場

701 団体・企業がブースを出展していた。日本の図書館総合展同様、児童サービス関係のブースは盛況であった。大取次 Ingram の児童書売場では書籍の配布？が行われているのか、かなり長い行列ができていた。一方、大学図書館関係のブースは適度に観覧者がいる程度であった。今回は、日本法人がない、あるいは代理店がない大学図書館向けサービスを中心にブースをまわった。電子書籍関係では、収録タイトル 100 万点超のサービスを提供する Rakuten OverDrive、スイス発 Bibliotheca、スペイン発 ODIL0 (<https://www.odilo.us/>) から、電子書籍のフルタイトルリストを送付していただくことをお願いした。また、日本法人がない Taylor & Francis、SAGE の担当者には、電子ジャーナルの論文 1 点売りサービス (PPV) の資料送付を依頼した。その他、Kanopy のような、日本にはサービスが存在しない図書館向け映画・音楽のストリーミングサービスが複数あり、競合しているのには驚いた。

IV 当初の目的は達成できたか？

(1) アメリカにおけるラーニングコモンズの総合評価 (北米研究図書館協会)

結果：事務局の事前質問から外された模様で回答を得られなかったため、帰国後、常任理事の Mary Lee Kenndy 氏に電子メールで質問を行って、ご教示いただいた資料からある程度のことは分かった。見学した 2 大学で実際に、ラーニングコモンズがどのように利用者が使っているかを見られなかったのは残念であった。

(2) 文献提供方法の先進的取り組み (ジョージタウン大学、メリーランド大学)

結果：帰国後、各大学見学担当者とのメールのやり取りで、メリーランド大学図書館では、日本では未導入と思われるサービス (CCC の GetItNow) を教えていただいた。両大学とも、OCLC、あるいは加盟しているコンソーシアムを利用すれば文献を素早く入手できる環境があるため、図書館サイトでは積極的に広報していないようであるが、機会があれば利用者の満足度を聞いてみようと考えている。

(3) オープンサイエンスの新しい知見 (年次総会の各種セッション)

結果：3 つのセッションから「オープン」についての知識は得られたものの、それを日々の業務に活かす方法が思い付かない状況である。一方で、「オープン」というキーワードでは、セッションにほとんど集客ができないことに驚かされた。

(4) 現地法人を通じた図書館向け電子書籍配信サービスの情報取得 (年次総会の展示会)

結果：Rakuten OverDrive、スイス発 Bibliotheca、およびスペイン発 ODIL0 の電子書籍担当者に直接、フルタイトルリストの提供をお願いできた。Bibliotheca については、その日のうちに日本法人担当者からすぐに連絡が入ってきた。

V さいごに

本研修中では、多くの知見を得ると共に、伝統的な、かつ現在の図書館サービスの重要性を考えさせられる素晴らしい機会となった。また、帰国後に研修先で説明をしていただいた 10 人近くの海外関係者とメールのやり取りを行い、追加の質問を行うこともでき貴重

な財産となった。このような貴重な機会を与えてくださった私立大学図書館協会の皆様、ツアーを企画下さった ALA・米国図書館研修事務局（丸善雄松堂株式会社様、図書館総合展運営委員会様）、所属学園関係者の皆様にこの場をお借りし、心より御礼申し上げたい。

以上